

ToBiRa-まち貢献プロジェクト活動レポート

2025/8/24

1. まち貢献 project とは？

ToBiRa-まち貢献プロジェクトは、中高生が農業・福祉・環境・商店街など地域の現場に足を運び、人や課題と出会う原体験を通して、社会とのつながりを体感し、「生きる力（主体性・共感力・行動力）」を育む実践型プログラムです。

2. Project 名

農業サポートプロジェクト

3. 実施日時

2025/8/24

4. 活動場所/関係先

蓮葉果紅土気

5. 実施概要

(1) 竹林整備活動

ToBiRa メンバー1名に対して、子ども5名のグループを編成。乱雑に成長した竹を銚やのこぎりで人の手の力で切り倒し間伐をする。その切り取った竹を活用し、流しそうめんのイベントや竹炭・肥料づくりに生かす。

(2) 流しそうめん体験

竹林整備活動で切り倒した竹を生かし、流しそうめんのイベントを実施。器も竹の節を利用し、作成。

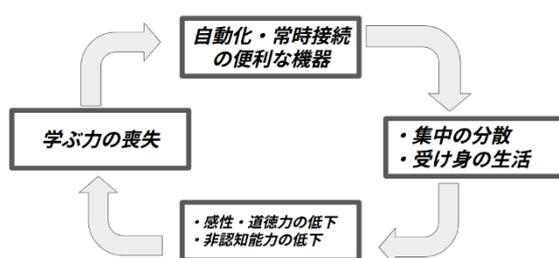
(3) 竹炭・コンポストづくり

(1)(2)の活動で出た竹や生ごみを活用し竹炭・肥料づくりをし循環型農業の体験活動。

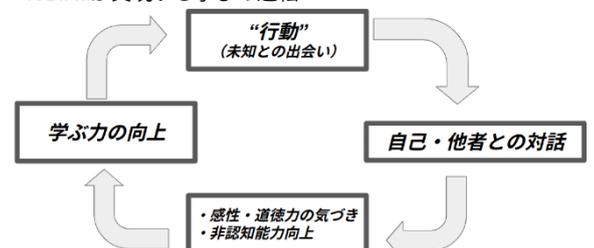
6. 農業サポート project の教育的狙い

(1) ToBiRa が描く子どもの成長循環図

便利な世の中が阻む子どもの成長



ToBiRaが実現する学びの逆転



五常の徳 ※徳：品性

1. 仁：損得勘定や自己中心的ではない相手への言動
2. 義：正しい行い→正しい行いが自分自身に対する自信を形成
3. 礼：貴賤上下関係ない相手への敬意
4. 智：教養を持った正しい判断
5. 信：（１）～（４）の４徳の研鑽で信頼される人に



“徳”の素養が開く
→聞くから聴くに
相手の言葉を真心を持って受け止め、学ぶ力の向上に寄与

（２）成長循環図について

NPO 法人 ToBiRa は“困難との出会い”を子どもたちに体験をさせ成長をさせることに主軸を置いている。この困難との出会いによって、自分自身と向き合う時間（自己対話の時間）が増え、結果的に感性や道徳力・非認知能力が磨かれ、学ぶ力の向上につながると捉えている。この自己対話の時間は現代のスマートフォンの登場のように、“常時接続時代”になってしまい、確保しにくくなっている。将来的な AI の席捲が予想される時代は、非認知能力の重要性が教育経済学などで取り上げられているが、その力の育成は、現代の便利な環境によって阻まれている矛盾がある。

この自己対話へと誘導し、子どもを本質的に成長させるきっかけづくりをまち貢献 project で作り上げることを目標としている。

（３）今回の教育的狙い

上記の“自己対話”へと子どもたちを誘導するために、三つの手立てを講じた。

- ① ToBiRa メンバーが子どもの内面に迫りやすいようにグループ制にした。
- ② 本日の mission を提示
「ToBiRa メンバー、蓮葉果紅の方々のお話を聞く 中で自分の人生について参考になる部分を見つける。」
- ③ 内面に迫る問の設定
「将来何を目指してるの？など」
- ④ Mission に応じた振り返りで内省化を促す

7. 活動の様子

（１）竹林整備活動

無数に生えた竹林を、伐採し間伐をした。竹は大きいもので中学生の腕の3～4倍ほどの太さのものがあり、のこぎりで切るにはかなりな重労働である。伐採する竹は乱立する竹林の中で切り倒す方向をメンバーで決めその向きに沿って、半月状の空洞を作り、比重を変えることによって切ることができる。太い幹の竹はなかなか刃が通らず苦勞していたが、子どもたちは進んで切ろうとしていた。特に、普段主体的に声掛けや行動をすることができない子どもも、好奇心から積極性を持って取り組んでいた。自然には、子どもの内なるエネルギーを引き出し、自発的に働きかける何かがあると感じた。傾いた竹は、素直に倒れえることは稀で、近くの木や竹にひっかかることもあった。その時は、数人の力で、後ろに引きながら倒していた。竹の伐採は、一人で実行するにはかなりの苦勞を要するため、必然

的に仲間と協働的に働きかけなければならず、5人組の各グループの団結性が上がっているように見えた。

また、切り倒した竹は、4メートル間隔に切り、上部の枝や葉も除去し、肥料用に積み重ねる作業もしていた。



(2) 昼食

昼食は、流しそうめんのイベントを実施していただいた。多くの子どもたちは流しそうめんの経験は無く、好奇心旺盛に準備をしていた。流しそうめんを実施する上で、必要な準備は、そうめんを流す、ルートづくり(主に大人が担当)、めんつゆを入れる器づくり(竹の節を利用)、薬味などの調理である。器づくりは、(1)と引き続き、熱中しながら取り組んでおり、調理組は慣れない包丁を使い、薬味を切っていた。「〇〇やりたい人？」と声を掛けると、一斉に手が上がるなど、主体的に昼食準備に取り組んでいた。この行程の中で、“食”の貴重さや有難みを少しばかり感じているようであった。流しそうめんは、我先につかみ取って、おいしそうに食べている姿が印象的であった。

流しそうめんがひと段落ついた後、蓮葉果紅と関係を築いていた現職の無農薬農家の方が、スイカを持ってきてくださり、参加していた幼稚園生を交えてスイカ割をした。自然のイベントで一体となって楽しんでいる姿が印象的である。



(3) 肥料づくり(コンポスト)・竹炭づくり

昼食後は2グループに分かれ、肥料づくりと竹炭づくりに取り組んだ。竹炭づくりは、流しそうめん で使った長い竹や器で使った竹などを更に細かく裁断し、最終的に小型のドラム缶のようなもので蒸して竹炭にしていた。竹炭は、繊維の形状からか農地にまくことによって水はけが良くなる効果を生むようである。

肥料づくりは、昼食で食べたそうめんやスイカ、薬味などあらゆるものをコンポストに入れ、依然に整備してあった肥料土と混ぜ合わせていた。途中で投入した有機肥料の匂いに悶絶しながらも、鍬やス

コップでコンポストの土を手入れしていた。

これらのように、竹を伐採し、イベントで活用し、最終的に一つも余さず肥料にする。このような循環型の環境づくりを体感できるようなプログラムを組み立てて頂いた。日ごろ学校で学んでいる要素も豊富に出てきていて、身に付けた知識と関連付けて捉えている子どももいた。



(4) 振り返り活動

蓮葉果紅土気様のメンバーの方々にお礼とあいさつを述べた後、最初に組んだグループで再集合し、一日の振り返りを行った。“循環型”“農家の苦勞”などの声が上がったが、人生軸の話題を述べる子どもはほとんどいなかった。



8. 成果・課題と次回への展望

○成果

- ・ 大自然のパワーを受け、一日を通して溢れる笑顔で活動ができた
- ・ 循環型の自給自足経済を肌で感じ、知識と関連付けている子どもがいた
- ・ 普段自分自身から発信できない子どもが、主体的に取り組んでいた
→自然には主体性を引き出す、磁性がある？
- ・ 1人では解決できない課題に直面する中で自然とメンバー内で声を掛け合い協働して解決する姿が見られた
→集団の団結力や絆の深まりに寄与するため、チームビルディング要素でも設計できる

- ・自己対話を生むことはできなかったが、左記の非認知能力表の中で、忍耐力や自己効力感、協調性、共感、敬意などが磨かれた活動となった。

カテゴリー	キーワード	非認知能力の具体例
目標を達成する力	忍耐力	最後までやり抜く力
	意欲	積極的に取り組もうとする力
	自己制御	自分の行動をコントロールする力
	自己効力感	自分ならできると鼓舞する力
	目標への情熱	目標に向かって集中する力
他者と協働する力	社会的スキル	社会のなかで他者と関係を築ける力
	協調性	互いに譲り合い調和を図れる力
	信頼	信頼関係を築ける力
	共感	他者の感情を理解できる力
	社交性	人や社会とうまく付き合える力
	敬意	相手を敬い尊重できる力
	思いやり	相手の立場や気持ちを理解できる力
情動を制御する力	自尊心	自分を大切にする力
	自信	自分の能力や価値を信じる力
	楽観性	前向きな気持ちを持てる力

○課題

- ・ mission の人生軸の話はグループメンバーが5人と多かったため、難しかった
- ・ 竹の伐採など真新しいことを実行すると目の前のことに集中し、自己対話にはつながらなかった
- ・ メンバー内の細かな教育的手だてや支援にばらつきがあり、進度に差が生まれた
(子ども主体に取り組ませることは全員の共通理解できていた)

○今後の展望

- ・ 単純な作業か真新しい作業かで実現できる教育効果は変わる
- ・ 自分軸の対話に大人が誘導するには、単純な作業と少人数制が必要
- ・ 農作業は、設計次第ではチームビルディングの要素に寄与することができる
- ・ 新たな展望として、ToBiRa 自身が古民家や農作業場を持つ、「ToBiRa 村」への展望を持った
- ・ 中学生段階（特に男子）は、周囲の社会（大人や仲間などの人々）の想いや努力の過程に気づきにくい発達段階のため、最後の振り返りの中で、ToBiRa メンバーが関係先や ToBiRa メンバー、参加した子どもなどの表では見えない姿を言語化し、仁や礼を刺激し、“深い敬意”を持てるようにすることも大切である。

